

寺報

善巧

発行

938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
宇奈月 0765(65)0055

賀正



新年お目出度つござります。
父が亡くなつて、此の私が住職
になつてから、早いものでもう四
十年になります。
「十年一昔」という言葉さえある
のですから、四十年の間には、何
も彼も変つて了つたという感じは
抜けません。

有為転変の世の中とは、よく言
つたもので善巧寺を中心として世
間を眺めて見ても、変化の相は、
至るところに現成しています。
毎年元旦には、年頭詣りの
皆様方門徒衆と、顔を合せて
御挨拶を交して参りました。
その皆様方が、既に世代変り
して、初代から二代、時には
三代目の若いジェネレーション
に移つて居られます。此の文章を書いている住職
自身、三十才台の壯年の頃も
あり、スコップを手に、雪搔
きに励む氣力もあつたもので
す。私は、徒らに懐旧の思いに
耽つて居るではありません。
世の無常の現実相を直視す
ることから、私の所感を始めて見
た次第なのです。

「知らず、生れ死ぬる人、何方よ
り来りて、何方へか去る。又知ら
ず、仮の宿、誰が為に心をなやま
し、何によりてか目を悦ばしむる。」
これは、鴨長明の有名な文章の
一節です。そして鴨長明は、親鸞
聖人とはほぼ同時代の人物です。
此の四十年、私達を取り巻く日

本社会の変り方は、国際関係の複

年頭所感

新年お目出度つござります。
父が亡くなつて、此の私が住職
になつてから、早いものでもう四
十年になります。
「十年一昔」という言葉さえある
のですから、四十年の間には、何
も彼も変つて了つたという感じは
抜けません。

有為転変の世の中とは、よく言
つたもので善巧寺を中心として世
間を眺めて見ても、変化の相は、
至るところに現成しています。
毎年元旦には、年頭詣りの
皆様方門徒衆と、顔を合せて
御挨拶を交して参りました。
その皆様方が、既に世代変り
して、初代から二代、時には
三代目の若いジェネレーション
に移つて居られます。此の文章を書いている住職
自身、三十才台の壯年の頃も
あり、スコップを手に、雪搔
きに励む氣力もあつたもので
す。私は、徒らに懐旧の思いに
耽つて居るではありません。
世の無常の現実相を直視す
ることから、私の所感を始めて見
た次第なのです。

「知らず、生れ死ぬる人、何方よ
り来りて、何方へか去る。又知ら
ず、仮の宿、誰が為に心をなやま
し、何によりてか目を悦ばしむる。」
これは、鴨長明の有名な文章の
一節です。そして鴨長明は、親鸞
聖人とはほぼ同時代の人物です。
此の四十年、私達を取り巻く日

本社会の変り方は、国際関係の複雑さ、経済政治の変貌、想像も出
れない科学技術の進展と、何処か
見ても、刻一刻、移り変つて止
まる所を知りません。此の恐るべき
転変の中に、一見安閑としてい
る私達一人一人は、実は、大きな
蜘蛛の網に引掛つて、ジタバタし
ている虫と同じではないでしょうか。
「よろづのことみなもて　そら
ごと　たわごとまことあることな
し」と仰せられ、「われもひと
もそらごとをのみまうしあ
ひさふらふ」と言われている
親鸞聖人のお言葉は、皆様御
承知の通りです。
変化の相の果敢なさは、一
見美しく見えます。鴨長明の
文章の中の無常感は、此の果
敢なさの美学の上に立つた感
傷に過ぎません。

親鸞聖人は、このような美
的な無常思想にとどまるこ
とがなかつた。そこを越えて、
眞実の世界を確立して下さつ
たものと思います。

私は、元旦の一日前、門徒の
方々と御挨拶する機会に接するた
びに、移り變る世の動きの中につ
て、尚搖ぎなき念佛の心こそが
毎年毎年、皆様方を善巧寺の如來
さまの前に導いている姿を直視す
るのです。いや、直視したいと思
うのです。

變るものと、そして變らないも
の。その變らないものを、私は、
大切にしたいと思ひます。

善巧寺の大修復事業の完成を祝つて、十月二十日、はなやかに落慶法要が勤修されました。午後一時、花火を合図に、願蓮寺さんに集合した稚児童子、建設関係者、総代、労者、婦人衆、樂人、法中、伝供衆など、総勢四百人を越える大行列がゆるやかに歩を進め、境内では童子衆が五色の花びらを散華し、本堂内ではみやびな奏楽の中、出仕者全員の名前が読み上げられ、伝供衆がおそなえをしたあと、八尾の聞名寺住職の導師で、満堂の参拝者とともににお正信偈を唱和しました。



おつとめの後は、記念講演。(下段に掲載)めでたく法要が終わつたところで、境内で大園遊会が催され、タル酒や屋台のごちそうで千人を越える門信徒の方々や僧侶のみなさんが一緒になつて、たのしいひとときを過ごしました。

本当にうれしいかぎりの法要でした。これもとにかく門信徒の皆さん

が一丸となつてがんばつて下さったおかげでありまして、心から、もう一度、お礼を申しあげさせていただきます。

さて、当日のもよは、次のペー

本日はおめでたい法座でございまして、由緒ある善巧寺が美しく荘嚴されまして、檀家の方々もお喜びのことございましょう。

さて今日の話は、あなた方が間違なくお淨土に参れるという話でござります。

どうして参れるかといえば、如来さまが南無阿弥陀仏のお名号の中には、この私が淨土に参れるすべてを仕上げられているからであります。

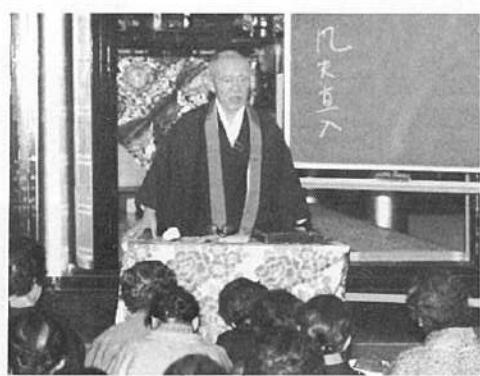
これを他力回向と申しますが、これは完全性とでも申しましよう。

これには三つあります。一つには往還の回向、二つには行信の回向、三つには因果回向。

まず往還回向ですが、これは住相、還相と申しまして、永遠性です。お淨土へ参つたものは、また

迷いの世界へ返ってきて、縁なき

落慶法要



法要記念講演

行信教校々長
利井興弘師

生活の中で、あなた方がとなるところのお念佛は、朝、晩か、あるいは寝てもさめてもか、はたまた、うれしいつけ、かなしいにつけ、いろいろあるうかと思ひます。気がついたとき、いつでもいいと書いてあるから、思い出したらナンマンダブ／＼となえつつ、いま申しました他力回向の三つの味わいをかみしめかみしめ、よろこんでいただければこれにすぎないわせはないわけでございます。

ものを救うというはたらきをさせていただくことができるのです。これはつまり弥陀同体、仏さまと同じ姿になれるといういわれであります。

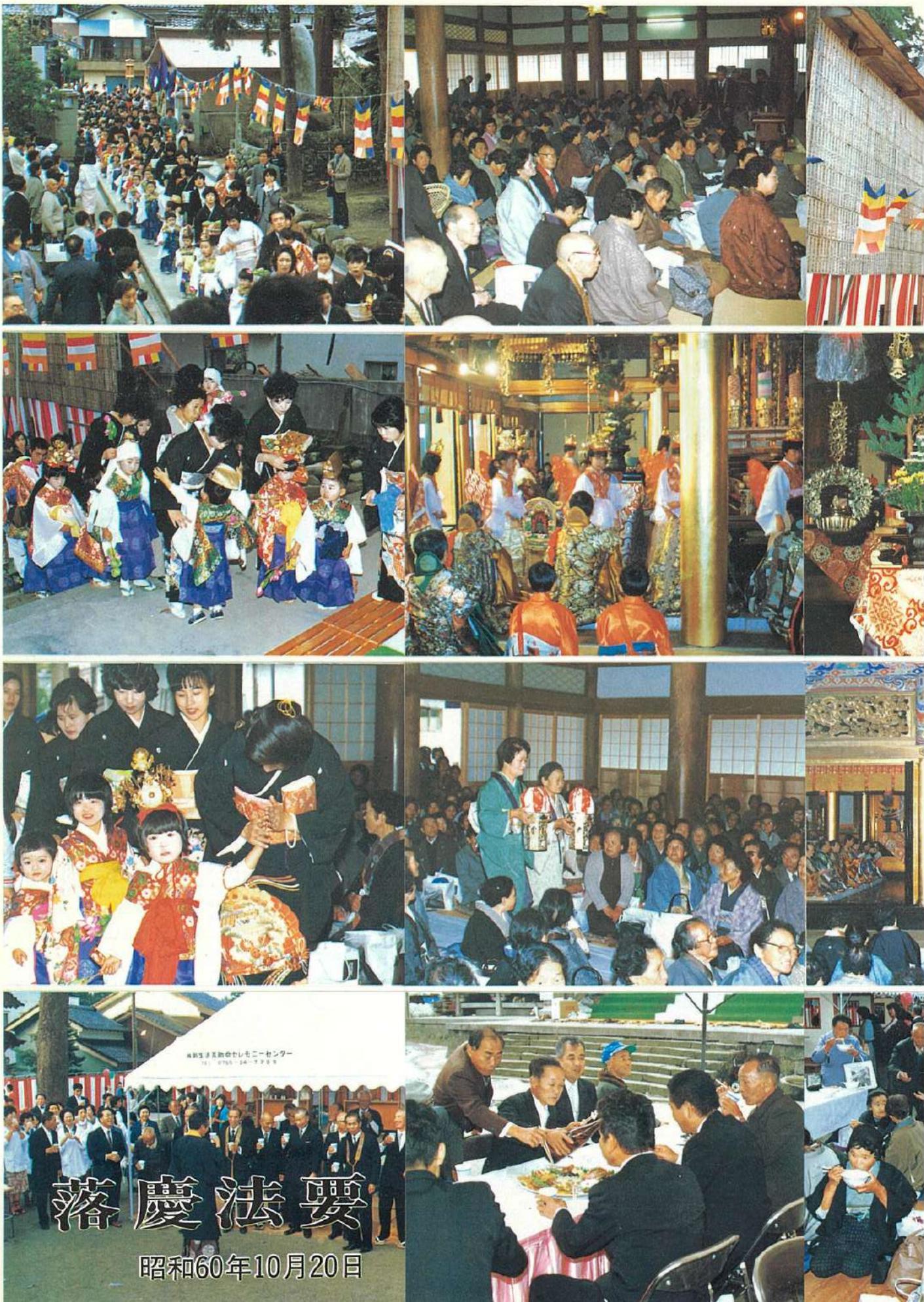
二つには行信の回向です。これは主体性の問題でありまして、親鸞聖人が仏になられたと、蓮如上人が仏になられたと、他の人を見ていてもどうにもならないのです。大事なのはあなた、わたしです。このわたしが仏にならねば何にもならない。で、その行と信はすだける。ナンマンダブ／＼。二つには、このわたしが仏にならせていただける。ナンマンダブ／＼。そして三つには、まちがいなく淨土に参らせていただける。

佛のいのちの全體が、他力の回向として与えられるのです。

のわたしが、因果回向、つまりはまちがいなく仏の世界にうまれます。これはつまり弥陀同体、仏さまと同じ姿になれるということでありまして、その他力の回向がどこに仕上がるでございます。

そこで、あなた方が口にとなえお念佛は、ナンマンダブ／＼。





要法慶謹落

昭和60年10月20日

善巧寺修復事業・事業報告

本堂	大屋	根漏	水会	
3月20日	緊急	臨時	總代	設置
4月3日	專門	委員會	札工	式會
5月14日	入		式	式會
6月1日	起		札工	事務
8月11日	上		工會	會員
10月16日	完		札工	委員
60年3月20日	總		式會	工會
5月7日	第2期	工時	入	
5月8日	起			
6月15日	完	成		
6月16日	總	代		
7月15日	第3期	工事	入	
7月16日	法要	實行		
7月22日	起			
9月30日	完	成		
10月20日	落	慶	法	
12月8日	總			

善巧寺修復事業収支決算書

1. 収入の部

(单位：巴)

項 目	決 算 額
瓦 懇 志	55,015,000
落 慶 法 要 懇 志	2,225,278
雜 収 入	367,984
合 計	57,608,262

2. 支出の部

卷之三

項目	決算額	項目	決算額
① 本堂修復費	41,199,643	③ 庫裡防水工事費	5,791,878
屋根修復費	29,800,000	工事費	5,300,000
同追加工事費	1,650,000	設計・監理費	100,000
付帯工事費	1,950,000	追加工事費	200,000
設計・監理費	1,460,000	総務費	126,000
消防設備費	1,876,000	諸経費	65,878
総務費	990,439	④ 落慶法要費	4,885,065
諸経費	626,204	莊嚴費	299,200
記録器具費	272,000	法中費	1,380,000
借入金登記料	145,000	記念事業費	596,670
境内整備費	450,000	記念品費	1,448,600
仏具保管費	450,000	記録費	269,930
法名軸新調費	1,000,000	総務費	511,100
防雪設備費	530,000	事務費	196,580
② 排水工事費	3,808,327	雜費	182,985
工事費	3,600,000	⑤ 運営費	1,339,724
設計・監理費	70,000	借入金返済	1,000,000
石工費	41,000	借入金利子	339,724
総務費	73,976		
諸経費	23,351	合計	57,024,637

収入総額	57,608,262円
支出総額	57,024,637円
差引残額	583,625円
* 特別会計へ繰入れ	

* 特別会計へ繰入れ

善巧寺の修復実行委員会は十二月八日に開かれ、二年間にわたる修復事業の事業報告と決算報告を行いました。（別表）

さん、森岡昭二さん、谷口小一郎さん、本波ひささん、河村といさん、大藪富美子さんの二十三名と、照行寺、法輪寺、善巧寺。

にとりかかったこと。そしてようやく募財が工事に追いつき、六年にはいって第二期、三期の工事が可能になつたこと。最後は十日

それには法要懇意と
雜収入で合計五千
七六〇万八二六一
円と、当初の予想
をかなり上回わづ
たこと。このため赤字になる
支出面では大屋根

からの追加懇志は寺の特別会計へ繰入れることとし、同日、実行委員会を解散しました。

善巧寺修復事業決算報告 実行委員会解散

12月8日

二十粩は積っている。ストーブをつけ、毛皮を座布団代りにフローリングの上に敷き、此處一週間、京都、東京、横浜と留守にしていた期間、たまつた書類の整理に取りかかる。新刊雑誌三冊も読みたし、何よりも永田文昌堂から送つて来た館先生の本に目を通さねばならない。

「私老来なすこともなく過ごしておりますが、此の度書きためた愚見数篇をまとめて『生死すなはち涅槃なり——浄土真宗と私』」を出版いたしました。献呈申し上げます。高覧を仰ぎ御叱正を

賜わりますよう平に御願いを申し上げます」との御手紙も頂いて

いる。

十二月十日 雪

二十粩は積っている。ストーブ

をつけ、毛皮を座布団代りにフロ-

ー リングの上に敷き、此處一週間、

京都、東京、横浜と留守にしてい

た期間、たまつた書類の整理に取

りかかる。新刊雑誌三冊も読みた

し、何よりも永田文昌堂から送

つて来た館先生の本に目を通さね

ばならない。

「老來」と書いておられるが、著

者は、私と同じ明治四十四年生れ

をつけて、毛皮を座布団代りにフロ-

ー リングの上に敷き、此處一週間、

京都、東京、横浜と留守にしてい

た期間、たまつた書類の整理に取

りかかる。新刊雑誌三冊も読みた

し、何よりも永田文昌堂から送

つて来た館先生の本に目を通さね

ばならない。

十二月十一日 略

十二月十二日 略

十二月十三日 略

十二月十四日 略

十二月十五日 略

十二月十六日 略

十二月十七日 略

十二月十八日 略

十二月十九日 略

十二月二十日 略

十二月廿一日 略

十二月廿二日 略

十二月廿三日 略

十二月廿四日 略

十二月廿五日 略

十二月廿六日 略

十二月廿七日 略

十二月廿八日 略

十二月廿九日 略

十二月三十日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月四十日 略

十二月廿一日 略

十二月廿二日 略

十二月廿三日 略

十二月廿四日 略

十二月廿五日 略

十二月廿六日 略

十二月廿七日 略

十二月廿八日 略

十二月廿九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月四十日 略

十二月廿一日 略

十二月廿二日 略

十二月廿三日 略

十二月廿四日 略

十二月廿五日 略

十二月廿六日 略

十二月廿七日 略

十二月廿八日 略

十二月廿九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略

十二月卅八日 略

十二月卅九日 略

十二月卅日 略

十二月卅一日 略

十二月卅二日 略

十二月卅三日 略

十二月卅四日 略

十二月卅五日 略

十二月卅六日 略

十二月卅七日 略</

降つた積つた年の暮



内陣法名軸新調
本堂内陣の門徒法名軸が新調され、十月二十日の落慶法要でおひもとさされました。

修復事業の懇志完納の方へのお礼に法名を記載させていたぐ段になつて、これまでの軸では間に合わなくなり、本山絵表所にお願いして一幅目からすべて新調させさせていただきました。お寺参りの折には是非お焼香を。

善巧寺の常例行事

お 婦 壮 雪 日 お
ん 曜
經 人 年 子 學
の 劇
会 会 会 団 校 講
第一 每月 每月 每月 每月 每月
一月 第一月 第二月 第四月 第一日
第三土曜日 第二土曜日 第四日曜日 第六日

「わたしのおしゃれば
『わあーなつかしい、や
るさと富山を思い出し
ます。是非送って』と
か『将棋の駒入れに小
ぶりのものを』とかい
ろいろ。



「見たよ」「読んだよ」「若ハントでそ
ういう人だつたんですか」等々。
その若ハンが、本
山出版部から報恩講
によせて「南無のこ
ころ」という小法話
を出版しました。

本願寺新報の書評によれば、「身
近でわかりやすく、念佛のこころ
を伝えている」とのこと。



分野は違いますが、お百姓さん
の作文で、毎日農業記録賞の優良
賞をもらわれたのが下村の岩上己
之助さん。いやあ、これもうれし
いじやないですか。ねえみなさん
うれしいことメデタイことは、み
んなでよろこび合おうじやないで
すか。「こんなごほうびもらつた。」
なんてこと、お知らせ下さい。
ねえ、どうですか、今年は、み
んなでほめ合い、よろこび合つ年
にしませんか。ウレシイ便り待つ
てます。

お寺ではじめたオハチャマたぢの手作りの「つつみ」の商品化。

TSUTSUMI
つ つ み



北日本新聞でそんなことを考える
紙上シンポジウムがあるようです。
寺の若ハンも一言申し上げてお
りますのでご覧下さい。

お寺の門徒さんの関係で、昨年日本一になつた方がいらっしゃいます。スポーツ関係で？ちがります。芸術です。ピアノです。全日本音楽コンクールのピアノ部門で最優秀賞を獲得されました。

合

掌